

称呼類似の再検討（1）

第1章 モーラの増加が与える影響



会員 須賀 総夫

要 約

商標の類否の判断において、称呼類似が重要な地位を占めることは、いまさらいうまでもないであろう。しかし、実務の現状はといえば、毎年多数の審決や異議決定がなされ、それらの中には似たような事件がけっこうあって、ときには、真っ向から対立する結論が出されたものもある。もちろん、類否を決定するのは称呼だけではないし、取引の実情が異なればそれが判断に影響するから、実質的に同じような称呼の組み合わせに対して、類似と非類似に結論が分かれることはやむを得ないのであるが、それにしても類否判断を貫く原則というものが（『商標審査基準』に示されたようなおおざっぱなものでなく）存在するはずである。このような思いから、筆者は審決および異議決定を長期的に検討し、体系化を試みている。そのデータがある程度たまり、議論の資料として実務家の参考になると期待できるに至ったので、本誌の誌面を借り、数報に分けて発表する。称呼類似の「再検討」と題するゆえんである。本報では、皮切りとして、称呼がもつモーラ数の差異が、類否判断にどのように影響するかを調べた結果を報告する。

調査の対象は、平成1～20年の間になされた審決および異議決定*である。

目 次

1. 称呼の類否判断に影響を与える諸因子
2. 前提となるいくつかの概念
3. 称呼におけるモーラ数
4. V音節の加入によるモーラの増加が与える影響
5. CV音節の加入によるモーラの増加が与える影響
(以下次号)
6. 語尾に付加した「ス」または「ズ」のもつ特殊性
7. 語頭に付加した定冠詞「THE」の重み
8. この章のまとめ

1. 称呼の類否判断に影響を与える諸因子

対比する二つの商標の称呼が類似するか否かの判断に影響を与える因子にはどのようなものがあるか、という問題に対する原理的な解答は、「商標審査基準」（以下「審査基準」と略称）が商標法第4条第1項第11号に関して定めている、「7. 商標の称呼の類否を称呼に内在する音声上の判断要素及び判断方法のみによって判断するときには…」の部分において、おおよそ求めることができる。しかし、審査基準の教示するところはあまり体系的とはいえないし、用語の用い方

にしても音声学・音韻論で一般に承認されているものと異なっている。何よりも、例示が少数に止まり、類似とされる場合しか挙げてないという不満がある。（審査基準に対する批判は、別の機会にまとめて展開する。）

そこで、この「再検討」では、音声学・音韻論の観点から、称呼の類否判断に影響を与えるものとして下記の諸因子をとりあげ、それらを順次論じることとする。

- ①音節の加入によるモーラの増加
- ②特殊拍（長音・促音・撥音）の加入と交替
- ③有声・無声と清音・濁音・半濁音
- ④母音の交替
- ⑤子音の交替

そのほか、「欧文字商標」と呼ばれるグループに固有の問題を、

- ⑥アルファベット商標として論じる。

* 審決および異議決定のデータは、(株)パテントジャパン発行の『商標類否叢集』による。

2. 前提となる基本的な概念

類否判断に影響を与える諸因子について議論する上で最低限必要となる基本的な概念について、簡単に説明しておく。

音節 (syllable)

声学および音韻論にとって、もっとも基本的な概念のひとつである「音節」については、残念ながら決定的な定義がない。正確に言えば、歯切れのよい定義ができない。『言語学大辞典 用語編』三省堂 (1977) の定義を掲げると、つぎのとおりである (以下、ことわりないときは同書による)。

「音節は、単語よりは小さく (または等しく)、個々の音よりは大きい、発音上1つのまとまりをなす単位で、多くの言語において、1つの単語を区切って発音する場合にみられる。…日本語では、一般の人が単語を区切る場合の単位は文字にすると仮名1字で表わされるものにほぼ該当し、これは必ずしも音節とは一致しない。…」

日本語の音節の代表的な形態は、1個の子音 (consonant「C」であらわす) に1個の母音 (vowel「V」であらわす) が後続する形態 (CV音節) であるが、母音だけからなる音節 (V音節) もある。母音で終わる音節を**開音節**と呼ぶ。英語のように、子音で終わる音節 (C₁VC₂) を多くもつ言語もあり、そのような音節を**閉音節**と呼ぶ。

音節の内部構造をみると、「オンセット (onset)」と呼ばれる頭子音の部分 (上記のCまたはC₁, これがなない場合はV音節) と、「ライム (rhyme)」と呼ばれる音節の中心部分とからなる。後者は、「核 (nucleus)」となる母音またはそれに相当するものが必要で、最後に「コーダ (coda)」と呼ばれる尾子音の部分 (上記のC₂) からなるが、開音節はコーダを欠く。

モーラ (mora)

「音の長さについての音韻論上の単位。元来は韻律上の単位であり、主として、1音節をさらに分割して数える言語に適用される。『この音節は2モーラに相当する』のように用いる。」

…たとえば、…「居 (きょ)」「今日 (きょう)」「今日を」「供応」「供応を」は、それぞれ1, 2, 3, 4, 5モーラである。

何モーラということ、簡単に「何拍」ということ

がある。たとえば、3モーラの語であるというとき、3拍語という。

音節とモーラとの関係

ある音節が**長音** (引く音「ー」)、**促音** (つまる音「ッ」) または**撥音** (「ン」) (これらを、まとめて「特殊拍」と呼ぶ) を伴うとき、つまり2モーラの長さを持っているとき、その音節を**重音節** (heavy syllable) または**長音節**といい、3モーラの長さを持っているとき、**超重音節** (superheavy syllable) または**超長音節**という。これらと区別する必要があるとき、1モーラの音節を、**軽音節**または**短音節**という。

審査基準の用語との関係

「音節」は英語の syllable の訳語であると一般に理解されているが、審査基準では、単に「音」という語であらわし、補足的に音節の語を用いている。「モーラ」は、審査基準では用いられていないし、審決でも見かけない。モーラに相当する概念を示すため、審決ではしばしば「音数」という語を用いているが、「音」が「音節」を意味するため、結果として「音数」が音節数を意味することになってモーラ数を意味せず、重音節や超重音節が関与する場合に、混乱を生じていることがある。

一方、「シラブル」という語も審査基準に登場するが、音節という意味では使われず、それより大きな (2以上の音節からなる)、称呼の構成成分というような意味である。

商標の称呼はカタカナで表記することが実務慣行として行なわれており、多くの場合にそれで十分であるとともに、適切であるといえる。この一連の報告では、単音ないし音素を論じるために必要な場合に限って音声記号ないし音素記号を使用し、それ以外はカタカナ表記による。

3. 称呼におけるモーラ数とその増加

日本語にとって、音節と並んでモーラが重要であるならば、商標の称呼もまた、日本語の「モーラ言語」としての特性を示すはずである。ただし、ここで「日本語」というのは共通語 (より基本的には東京方言) を考えたものである。(音節だけで整理できる言語もあって、「シラビーム言語」とよばれる。日本語の方言

の中には、モーラ言語としてよりも、シラビーム言語として扱ったほうがよいものもある。

日本語をモーラ言語としてとらえるという考えにもとづいて、モーラ数の差異が、類否判断に与える影響を追求した。二つの称呼を比較するとき、モーラ数が少ない方を基準におき、それから見て多い方をモーラ数が「増加した」と考えて議論を進める。

称呼においてモーラの増加がどのようにして引き起こされるかといえば、つぎの二つの場合がある。

- ・音節の加入：加入する音節は、母音だけからなるもの（「V音節」の語であらわす）と、子音+母音からなるもの（「CV音節」であらわす）が可能である。
- ・特殊拍の加入：特殊拍とは、前記のように、長音（「R」であらわす）、促音（「Q」であらわす）および撥音（「N」であらわす）である。これらは、いずれも語頭に立たない。つまり、長音Rおよび撥音Nは語中および語尾に存在し得て、促音Qは、共通語では語尾に来ることがなく（一部の方言では可能であるが）、語中にしか存在しない。

表1-1 母音の加入によるモーラの増加

加入音	モーラ増	語 頭			語 中			語 尾		
		商標A	類否	商標B (+V)	商標A	類否	商標B (+V)	商標A	類否	商標B (+V)
ア	2→3	ハズ	×	アハズ				リニ ビビ	×	リニア ビビア
	3→4	クリラ ミューズ イリス	×	アクリラ アミューズ アイリス	ジョナ シーズ	×	ジョアナ シアーズ	エスコ サボイ アメリ	×	エスコア サボイア アメリカ
	4→5	イデアル	×	アイデアル	パラディム テオップ	×	パラディム テオアップ			
	5→6				クレージュ タムテック	×	クレアージュ タムテック			
	6→7				スタージッド アクエアラス キュートキュート	×	スターアジッド アクエアラス キュートアキュート			
	7→8				ケンアンドメリー	×	ケンアンドメアリー			
イ	2→3				ボル	×	ボイル	プレ クレ	×	プレイ クレイ
	3→4	イチコ	×	イイチコ	プレス レバン エピス セント セコム レピア	×	プレイス レイバン エイピス セイント セイコム レイピア	ベルジェ サンテ マルセ トミー	= = ×	ベルジェイ サンテイ マルセイ トミー

特殊拍が関係する場面には、それが加入する（モーラの増加を招く）場合のほかに、種類の異なる特殊拍どうしが交代する（モーラに増減がない）場合があるが、これらはまとめて次章で取り扱うことにして、この章では、音節の加入によるモーラの増加だけを対象とする。

4. V音節の加入によるモーラの増加

(1) 審決例のデータ

V音節、すなわち「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の5種の母音のいずれかが、語頭に立ち、語中に挿入され、または語尾に付加し（この3種の場合をまとめて「加入」という）、それによってモーラが増加した場合、称呼の類否判断にどのような影響があるか、を調べた結果を表1-1にまとめた。

表において、審決が認定した称呼はすべてカタカナで表記し、それらが類似と判断されたものは「=」で、非類似と判断されたものは「×」で示した。（以下同じ）

加入音	モーラ増	語 頭			語 中			語 尾		
		商標 A	類否	商標 B (+V)	商標 A	類否	商標 B (+V)	商標 A	類否	商標 B (+V)
	4→5	ドメシン	×	イドメシン	クレアス エピック ソルノン エスター ロプリン ウエブス アエリア エコマー レアース	= × × × × = = × ×	クレイアス エイピック ソイルノン エイスター ロイプリン ウエイブス アイエリア エイコマー レイアース			
	5→6				レスポール シャンルビー マクロロン ラフィックス オートザム	= = × × ×	レイスポール シャインルビー マイクロロン ライフックス オートザム	ビバランス	×	ビバランスイ
	6→7				クックグルメ プレステージ サフレックス ウエブジェット	× × × =	クイックグルメ プレステージ サイフレックス ウエイブジェット			
	7→8				プレステーション オデンヨコチャー デュープレックス	= × =	プレステーション オイデンヨコチャー デュープレックス			
ウ	2→3	エラ	×	ウエラ	オム バマ	× ×	オウム バウマ	ジロ	×	ジロウ
	3→4				マルメ	×	マルウメ			
	4→5				アイリス ハイエル	= ×	アイウリス ハイウエル	カックラ	×	カックラウ
	5→6				ユトリッチ	=	ユウトリッチ	カクレンボ	×	カクレンボウ
	6→7				グレイスイン	=	グレイスイン			
	7→8				グラントエース	=	グラウンドエース			
	2→3				チュラ	×	チュエラ			
エ	3→4	サラ ルピア フィラ	×	エサラ エルピア エフィラ	キョーイ ゼイス	× ×	キョーエイ ゼイエス	マモリ	×	マモリエ
	4→5	シャンソン	×	エシャンソ ン	ウガロン	×	ウガエロン	エスプリ	=	エスプリエ
	5→6				オーケース	=	オーケーエス			
	6→7	スコープ オン	×	エスコープ オン	サンネックス	×	サンエネックス			
	7→8	サンパ ティック	×	エサンパ ティック						
	3→4	タカラ	×	オタカラ	ビゲン フェドラ イシス	× × ×	ビオゲン フェオドラ イオシス			
オ	4→5	イナール	×	オイナール	ヌクモリ デュラック アクトン ミントン	× × = ×	ヌクモオリ デュオラック アクオトン ミントオン			
	5→6				ミノノサト リピドール インフォフィス トリネット	× × = ×	ミノオノサト リピオドール インフォオフィス トリオネット	カプリッチ	=	カプリッチオ
	6→7	ハダレス キュー	=	オハダレス キュー						
	8→9				バインドマチック	=	バインドオマチ ック			

表1のデータから、類似・非類似の件数を集計すると、つぎの表1-2のとおりである。表1-5において、「類」は類似、「非」は非類似、「率」は非類似化率を表わす。「非類似化率」とは、称呼上のある差異(こ

ここでは母音アイウエオのいずれかの加入）に関して類否判断を行なった審決全体の事例数に対する、非類似の事例数の割合（%）である。この値は、その称呼上の差異が、称呼を非類似にする上でどの程度の影響力をもつか、という目安となる。

表1-2 母音の加入と類否

	語頭	語中	語尾	全体
	類：非 (率)	類：非 (率)	類：非 (率)	類：非 (率)
ア	0：5	0：10	0：5	0：20 (100%)
イ	0：2	11：16	3：2	14：20 (59%)
ウ	0：1	4：4	0：3	4：8 (67%)
エ	0：6	1：5	1：1	2：12 (86%)
オ	1：2	3：9	1：0	5：11 (69%)
計	1：16 (94%)	19：44 (70%)	5：11 (69%)	25：71 (74%)

表1-2の数字は、つぎの事実を語っている。

- ・母音「ア」が加入したときは、その位置が、語頭、語中および語尾のいずれであるにせよ、審決の結論はすべて非類似である。他の母音子音を含めて、「ア」は日本語の音節のうちでもっともよく聞こえる音であり、その加入は、位置によらず、称呼を異なったものとするのに十分な力を持つ。
- ・これに対して、母音「イ」の加入は、それによって称呼が非類似に転換する率が約6割と、「ア」にくらべて低い。「イ」が語中または語尾に挿入された場合、前の音節の母音との間で二重母音を形成することがあり、それが非類似化率を低くしている可能性がある。この点については、つぎに述べる。
- ・母音「ウ」および「オ」の加入は、それによって称呼を非類似に転換させる力は約7割であって、母音「エ」の加入が称呼を非類似に転換させる力が9割近いのに比べてとき、差がある。これは、「ウ」および「オ」が後舌母音であり、「エ」が前舌母音であるという違いが原因と考えられる。「ウ」と「オ」の間の違いは、数字としては小さいが、その差は、口の開き方の大小によるものであろう。
- ・5種の母音が称呼を非類似にする力は、ア>エ>オ>ウ>イ の順である。
- ・全母音を平均すると、母音の加入により称呼が非類似になる割合は74%である。この数字は、概略の傾向をいえば、「モーラの増加は一般に称呼を非類似にする」ということになるが、V音節の加入は、後記するCV音節の加入にくらべれば、称呼を非類似に転換させる要因としては、やや力が劣るというこ

とになる。

(2) 二重母音形成の可能性と類否判断

二重母音をどう定義するかにもよるが、日本語にも二重母音は存在するという立場が有力であって、少なくとも「アイ」「オイ」「ウイ」の3種は确实であるという。

とすると、「イ」が語中に挿入され、または語尾に付加した称呼においては、前のCV音節のVが「ア」「オ」または「ウ」のいずれかである場合、二重母音が形成される可能性がある。二重母音が形成されれば、実質上モーラの増加が生じないことになり、「イ」が加入する前と後の称呼が互いに類似のまま残る可能性が高い。

このような観点から、表1-1における、「イ」が語中に挿入され、形式的にはモーラが3→4、4→5、5→6および6→7に増加する場合を検討すると、下の表1-3のようになる。

もっとも例が多い [ei] の場合、類似・非類似が8：7と伯仲しているのに対し、二重母音形成の可能性のある [ai, oi, ui] においては、1：8と圧倒的に非類似であるところからみると、上に可能性を考えた、「二重母音が形成されてモーラ増加が実質上否定される」というメカニズムは成立していない、という結論が妥当であろう。

表1-3

母音の 接続	二重母音 の可能性	件数		
		合計	類似	非類似
ai	○	6	1	5
oi		2	0	2
ui		1	0	1
ei	×	15	8	7

5. CV音節の加入によるモーラの増加

(1) 審決例のデータ

前述のように、日本語の音節はCVの構成が代表的である。商標の称呼を構成する音節であって、外来語から生じる称呼または外来語風の文字商標から生じる称呼を表記するために必要な音節を含めて、CV音節が、ある称呼に加入して別の称呼を形成した場合、類否判断にどのような影響があるかを調べた結果が、つぎの表1-4である。称呼そのものを表わす上では、たとえば「フォ」とか「ツイ」とかの音節が必要であるが、ある音節の加入が称呼の類否に与える影響とい

う観点からみると、そのような特殊な音節を扱う必要は案外少ないことが経験的にしられた。実際に表1-4に掲げた「加入音」は、いずれも常用の音節である。

表1-4 CV音節の加入によるモーラの増加

加入音	モーラ増加	語 頭			語 中			語 尾		
		商標A	類否	商標B (+ CV)	商標A	類否	商標B (+ CV)	商標A	類否	商標B (+ CV)
カ	5→6				キギョードー ラジフォース	×	キギョーカドー ラジフォーカス			
ガ キ	5→6							バレンシア	×	バレンシアガ
	2→3							キキ	×	キキキ
	3→4				マシモ	×	マキシモ			
	5→6				ゲンキッズ	×	ゲンキキッズ			
	7→8							ショコクメンユウ	×	ショコクメンユウキ
ギ	4→5				ウナパイ ウナパイ	≡ ×	ウナギパイ ウナギパイ			
ク	3→4	ロシヤス オリカ	×	クロシヤス クオリカ				マステイ	×	マステイク
グ	5→6				エスコンポ	×	エクスコンポ	マルチシン	×	マルチシク
	4→5				アライア	×	アグラライア	モーニン キンコン サーフィン	×	モーニング キンコング サーフィング
	6→7				ベルグランデ	×	ベルググランデ			
	7→8							ワールドウイン	×	ワールドウイング
ケ ゲ										
コ	5→6	ネクサント	×	コネクサント						
	6→7	ヨイイッコン	×	コヨイイッコン	インフォーマス	×	インフォコマース			
	8→9				アイズファクトリー	×	アイコズファクトリー			
ゴ サ ザ	3→4	ペンタ	×	ペンタサ						
シ	2→3							ペプ	×	ペプシ
	4→5				セリーヌ	×	セシリーヌ			
	5→6				バスクラン	×	バスシクラン			
ジ	4→5				オステン	×	オステジン			
	5→6				プリストン カンボリン	×	ブリジストン カンボリジン			
	6→7				イワテノタビ	×	イワテジノタビ			
ス	4→5	プリウス	×	スプリウス	エコシス ニューマン ハルトン	×	エスコシス ニュースマン ハルストン	別の表に記載		
	5→6				ベトスキャン	×	ベストスキャン			
	6→7				テックメート	=	テックスメート			
	7→8				リングノチカラ マップポイント	×	リングスノチカラ マップポイント			
ズ	4→5				プロケア	=	プロズケア	別の表に記載		
	6→7				クインダイヤ ラクスライフ	= ×	クインズダイヤ ラクスズライフ			
	7→8				イーダイレクト	×	イーズダイレクト			
	11→12				エクスプローラー クラブ	=	エクスプローラー ズクラブ			
セ	4→5				オラシン	×	オラセシン			
ゼ	4→5						ビスター	×	ビスターゼ	
ソ	4→5	ロキフェン	×	ロキソフェン						
ゾ	5→6				アプレリン	×	アプレゾリン			

称呼類似の再検討（1）

加入音	モーラ増加	語 頭			語 中			語 尾		
		商標 A	類否	商標 B (+ CV)	商標 A	類否	商標 B (+ CV)	商標 A	類否	商標 B (+ CV)
タ	4→5							セラフィル	×	セラフィルタ
	5→6				マキサーゼ	×	マキサターゼ			
ダ	4→5							スパサラ	×	スパサラダ
チ										
ツ	2→3							ゲス パキッ	×	ゲスツ パキツ
	3→4							グラン	×	グランツ
	6→7				スポータイム	=	スポーツタイム			
デ	3→4	ショット	×	デショット	アバン インバ	×	アバデン インデバ			
	4→5	プランス	×	デプランス	フェリシモ	×	フェデリシモ			
ト	4→5				ビックル	×	ビットクル			
	5→6							ブリリアン アーチス	=	ブリリアント アーチスト
ド	4→5				メドック	×	メドテック	バランス	×	バランスド
	5→6	ロレックス	×	ドロレックス						
	6→7				ランローバー	×	ランドローバー	ナノフィール	×	ナノフィールド
	7→8				マインスケープ	×	マインドスケープ			
ナ	4→5	ノクリア	×	ナノクリア	リモンヤ	×	リモンナヤ			
	5→6							クサトリー	×	クサトリーナ
	7→8				アイスカクテル	×	アイスナカクテル			
ニ	4→5				クリーク ボーデン オステン	×	クリニーク ボニーデン オニステン			
	5→6	バイピッチ	×	ニバイピッチ	ハイセレン	×	ハイセレニン			
ヌ										
ネ	2→3							ポロ	×	ポロネ
ノ	7→8				シヨクブツサブリ	×	シヨクブツノサブリ			
	13→14				クルマオサガシセン モンテン	=	クルマオサガシノ センモンテン			
ハ	5→6	イヤスミン	×	ハイヤスミン						
パ	3→4	パラン	×	パパラン	セラン	×	セパラン			
バ	3→4				モジラ	×	モバジラ			
ヒ										
ピ	4→5				トパート	×	トピパート			
ビ										
フ	2→3				ニス	×	ニフス	ポロ	×	ポロフ
	4→5				オステン	=	オフステン	ハイパー	×	ハイパーフ
	5→6				ゼオローラ デオレッシュ	×	ゼオフローラ デオフレッシュ			
	6→7				バイオレッシュ	×	バイオフレッシュ			
プ	5→6	ルナゾール	×	プルナゾール						
		ロレックス	=	プロレックス						
ブ	2→3	リオ	×	ブリオ						
	4→5				ラベリン	×	ラブベリン			
	6→7				エバーライト	×	エバーブライ			
ヘ	7→6	マスティックス	×	ヘ マ ス ティックス						
ペ										
ベ										
ホ	4→5				ラットン	×	ラットホン			
ポ	6→7				ハイネックス	×	ハイポネックス			

加入音	モーラ増加	語 頭			語 中			語 尾		
		商標 A	類否	商標 B (+ CV)	商標 A	類否	商標 B (+ CV)	商標 A	類否	商標 B (+ CV)
ボ										
マ	4→5	ジッキー	×	マジッキー						
ミ	2→3							ココ	×	ココミ
	3→4				ロペン	×	ロベミン			
	5→6				ロイケラン	×	ロイケラミン			
ム	2→3							ビオ シャル フィラ	×	ビオム シャルム フィラム
	3→4							ジェルコ マキシ テトラ イオナ オプロ ゼニア ジョイコ メディコ ネスコ	= = × = × × × = ×	ジェルコム マキシム テトラム イオナム オプロム ゼニアム ジョイコム メディコム ネスコム
	4→5				アイフォン	×	アイムフォン	フリーダ ミレニア オプティマ グラディア マキシマ プレミア プレミア	×	フリーダム ミレニアム オプティマム グラディウム マキシマム プレミアム × プレミアム
	5→6				キャンコード スリエット	×	キャムンコード スリムエット	スペクトラ	=	スペクトラム
	6→7							インフュージア	×	インフュージアム
	メ	3→4	ニコン	×	メニコン					
モ	3→4	ナリス	×	モナリス						
ヤ	4→5							ハナマル	×	ハナマルヤ
	5→6							シンフォニー	×	シンフォニーヤ
ユ										
ヨ	6→7				オハーグルト	×	オハヨーグルト			
ラ	3→4	ドゥース	×	ラドゥース				アンヤ	×	アンヤラ
	4→5	シンシア キャデット	×	ラシンシア ラキャデット				ネクスト	×	ネクストラ
リ	3→4							ブルガ	×	ブルガリ
	5→6	リポペット	×	リリポペ ット	ヘモナーゼ コスミオン シーディスト ボトックス	×	ヘモリナーゼ コスミリオン シーディリスト ボトリックス			
	6→7				バイオソース ビーフレッシュ	×	バイオリソース ビーリフレッシュ			
	7→8				ビジュアルコ ール	×	ビジュアルリ コール			
	9→10				ウォーターフレ ッシュ	×	ウォーターリ フレッシュ			
ル	2→3							シャル デュレ	×	シャルル デュレル
	3→4	ナリス ティグレ	×	ルナリス ルティグレ				アムー カオー ルクソ クリア オプチ ペイパ	×	アムール カオール ルクソール クリアル オプチル ペイパル
	4→5				ロベミン ペペモコ ナチュケア アストム	×	ロペルミン ペペルモコ ナチュルケ アルストム	エターナ オリジナ	×	エターナル オリジナル

加入音	モーラ増加	語 頭		語 中			語 尾			
		商標 A	類否	商標 B (+ CV)	商標 A	類否	商標 B (+ CV)	商標 A	類否	商標 B (+ CV)
	5→6				マティニーク アーマック	×	マルティニーク アールマック	ライオンドー プリンシパ	=	ライオンドール プリンシパル
	6→7				パイミックス パイミックス コーラシール ハーバライフ オーラジェクト テフレックス	= ×	パイルミックス パイルミックス コーラルシール ハーバルライフ オーラルジェクト テルフレックス			
	7→8							サイバーダイア	×	サイバーダイアル
	8→9				ダーマサイエンス	=	ダーマルサイエンス			
レ	3→4	コパン	×	レコパン						
口	2→3	ココ	×	口ココ						
	4→5				アンドス	×	アンドロス			
	5→6				ストカイン アスメトン エアウール	×	ストロカイン アスメトロン エアロウール			
口	6→7				ニュートロピン	×	ニューロトロピン			
	7→8				エコフレンドリー	=	エコロフレンドリー			
ワ	4→5				ロイヤル	×	ロワイヤル			

表1-2にならって、各行の音節の加入が称呼の類否判断に与えた影響を集計してみると、順次下に示す表1-5ないし表1-15のとおりである。（事例のない加入音については記載を省略した。）

若干の表において、同じ称呼の組であって、類似の記号「=」がついたものと非類似の記号「×」がついたものとが併存しており、アミカケが施されている場合は、実質上同じ称呼の組みを一方は類似と判断し他方は非類似と判断した審決が存在することを示している。（このような審決の組を、筆者は「相反審決」と名付けた。相反審決はこのほかにもあるので、別にまとめて論じる。）

(2) カ行音の加入

圧倒的に非類似と判断されていて、唯一の類似は「ウナパイ／ウナギパイ」の組み合わせであるが、これ

表1-5 カ行音の加入と類否

	語 頭		語 中		語 尾		計	
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	
カ		0：2					0：2	
ガ					0：1		0：1	
キ		0：2					0：1	
ギ		1：1					1：1	
ク	0：2	0：1	0：1		0：1		0：4	
ゲ		0：2	0：4				0：6	
コ	0：2	0：2					0：4	
計	0：4	1：10	0：5				1：19 平均 95%	

は上記のように、非類似とされた例と相反審決をなしている。ウナギの略称として「ウナ」という語が用いられていて、観念的に同一、ということが類似と結論した根拠である。

(3) サ行音の加入

サ行音の加入にはさまざまなケースがあるが、その中で、語尾に「ス」または「ズ」が付加した場合は、きわめて事例が多く、かつ、それらの多くは類似と結論されている。これについては、次号でまとめて説明する。それ以外のケースでは、非類似がまったく優勢である。

表1-6 サ行音の加入と類否

	語 頭		語 中		語 尾		計	
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	
サ			0：6				0：6	
シ			0：2		0：1		0：3	
ジ			0：4				0：4	
ス	0：1		1：6		別の表		1：7	
ズ			2：2		別の表		2：2	
セ			0：1				0：1	
ゼ					0：1		0：1	
ソ	0：1						0：1	
ゾ			0：1				0：1	
計	0：2		3：22		0：2		3：26 平均 90%	

語中に「ス」または「ズ」が挿入された場合で、類似と判断された例はつぎの組み合わせであるが、

- [スの挿入] ①テックメート／テックスメート
 [ズの挿入] ②プロケア／プロズケア
 ③クインダイア／クインズダイア
 ④エクスプローラークラブ／エクスプローラーズクラブ

いずれも前後2個の要素からなっていて、前の要素が後の要素を修飾しており、その関係が所有(上記②および③)または複数(上記①および④)の表示である。「ス」または「ズ」の挿入が、観念的な変化をもたらしていないので、モーラの増加が称呼を非類似にするには至らず、類似と判断されたと解される。つまり、語尾の「ス」「ズ」の付加と同じことが、語中で行なわれたことになる。

(4) タ行音の加入

表1-7にまとめる。事例は多くないが、この場合もほとんど非類似と判断されている。

表1-7 タ行音の加入と類否

	語 頭	語 中	語 尾	計
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似
タ		0：1	0：1	0：2
ダ			0：1	0：1
ツ		1：0	0：3	1：3
デ	0：2	0：3		0：5
ト		0：1	1：1	1：2
ド	0：1	0：3	0：1	0：5
計	0：3	1：8	1：7	2：18 平均 90%

類似とされたのはつぎの2例であって、

- [ツの挿入] ①スポータイム／スポーツタイム
 [トの付加] ②ブリリアン／ブリリアント

このうち①は、前後2個の要素からなり、前の要素を「スポー」と聞くと「スポーツ」に違いないという予断がはたらいて、音韻観念としてそう聞こえてしまうのであろう。②も同様に、「ブリリアン」と聞いたときに、「輝かしい」意味であることが知られている語 brilliant が思い出されて、「ト」を付加して受け止められると思われる。

(5) ナ行音の加入

まとめると、表1-8のとおりである。

唯一の類似とされた事例は、「クルマオサガシセンモンテン＝クルマオサガシノセンモンテン」であって、観念の同一が長い称呼の間の差異を上回る影響があったと解される。ナ行音は鼻音のひとつであり、称

表1-8 ナ行音の加入と類否

	語 頭	語 中	語 尾	計
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似
ナ	0：1	0：2	0：1	0：4
ニ	0：1	0：4		0：5
ネ			0：1	0：1
ノ		1：1		1：1
	0：2	1：7	0：2	1：11 平均 92%

呼類似の判断ではその存在が軽視されそうであるが、そうでもない。

(6) ハ行音の加入

ひとくちにハ行音といっても、音声的にはさまざまなものが混在している。詳細は、後に有声・無声と清音・濁音・半濁音のところ述べるが、大きな差異として、「ハ行」の子音が摩擦音であるのに対し、「パ行」と「バ行」の子音は破裂音である。さらに、「ハ行」の子音の調音位置は、声門(ハヘホ)、軟口蓋(ヒ)、両唇(フ)と異なる。「パ行」と「バ行」では、前者が無声で後者が有声である。

表1-9 ハ行音の加入と類否

	語 頭	語 中	語 尾	計
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似
ハ	0：1			0：1
パ	0：1	0：1		0：2
バ		0：1		0：1
ピ		0：1		0：1
フ		1：4	0：2	1：6
プ	1：1			1：1
ブ	0：1	0：2		0：3
ヘ	0：1			0：1
ホ		0：1		0：1
ポ		0：1		0：1
計	1：5	1：11	0：2	2：18 平均 90%

しかし、それらの差違にもかかわらず、また「ハ行」は一般に「弱音」とされているが、ここでも CV 音節の加入は称呼を非類似にするのに十分な力をもっている。

(7) マ行音の加入

マ行音のうち「ム」に関して、語尾への付加による類否の問題が事例に富んでおり、かつ、その場合に限り、類似の結論が多数ある。それ以外は、すべて非類似と判断されている。

語尾への「ム」の付加が称呼を非類似にしない例は、つぎのパターンに分けられる。

表1-10 マ行音の加入と類否

	語 頭	語 中	語 尾	計
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似
マ	0：1			0：1
ミ		0：2	0：1	0：3
ム		0：3	8：12	8：15 65%
メ	0：1			0：1
モ	0：1			0：1
計	0：3	0：5	8：13	8：21 平均 72%

①ジェルコ／ジェルコム ジョイコ／ジョイコム メ
ディコ／メディコム

②マキシ／マキシム

③イオナ／イオナム ミレニア／ミレニアム マキシ
マ／マキシマム プレミア／プレミアム
スペクトラ／スペクトラム

金言、格言を意味する「マキシム」がどの程度知られているか疑問ではあるが、「マキシ」は「ミニ」に対する語として、主として「ごく長いスカート」の意味ではよく知られており、少なくとも観念上は、②のマキシ／マキシムを類似とする根拠は見出せない。

たとえば「ミレニア」は「ミレニアム」の複数であるように、ラテン語起源の「～um」の形の語と「～a」の形の語とは、観念上のつながりがあるが、この関係は、それほどよく知られてはいない。それらの中で、「プレミアム／プレミアム」に関しては、相反審決がある。

(8) ラ行音の加入

ラ行音は、商標の称呼としては好んで取り入れられ

ている。古代の日本語では、ラ行音は語頭に立たない音節であり（朝鮮語でも同様であり、現在まで保持されている）、古くは中国語の影響で、また新しくは欧米の文物の影響で増加したとみることができが、そのことがかえって、ラ行音を含む称呼は外来語風で斬新な響きをもたらし、商標の称呼として好まれるのであろう。いずれにせよ、そのために類否判断を問われる事例も、特異的といえるほど多数に上っている。「弾き音」を頭子音にもつラ行音の加入は、称呼を非類似にするに十分なようである。

表1-11 ラ行音の加入と類否

	語 頭	語 中	語 尾	計
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似
ラ	0：3		0：2	0：5
リ	0：1	0：8		0：9
ル	0：2	4：9	2：9	6：20
レ	0：1			0：1
ロ	0：1	1：5		1：6
計	0：8	5：22	2：11	7：41 平均 85%

(9) ヤ行音およびワの加入

事例はごく少数であり、すべて非類似。

表1-12 ヤ行音およびワの加入と類否

	語 頭	語 中	語 尾
	類似：非類似	類似：非類似	類似：非類似
ヤ			0：2
ヨ		0：1	
ワ		0：1	

(以下次号)

(原稿受領 2011. 10. 28)